松江工業高等専門学校
同窓会 会報
第10号
2020.8.1発行

同窓会事務局
〒690-8518 島根県松江市西生馬町14-4 松江工業高等専門学校内
TEL：0852-36-5111 FAX：0852-36-5119 E-mail: dosokai-jimukyoku@matsue-ct.jp
http://www2.matsue-ct.ac.jp/dosokai/

同窓会の発展・継続を願って

松江工業高等専門学校同窓会 会長 陶山 知政（24期・土木）

令和へと時代が変わりこれからという時に新型コロナウイルス感染症の蔓延による自粛生活、そして全国各地が頻繁に大規模災害に襲われるなど暗いニュースばかりが伝えられる今日この頃ではありますが、会員の皆様におかれましては益々ご健勝のことと思います。

さて、本同窓会も昨年11月3日には約120名の出席のもと大きな節目となる「同窓会設立50周年記念事業（式典・祝賀会）」を無事に終えることができました。

その際のあいさつでも述べさせていただきましたが、松江高専同窓会の歴史にとって50年はあくまでも通過点であり、今後60年、70年、そして100年へと発展・継続することを願っているところです。

そのことからこの機会に、これまで歴代会長から引き継がれてきた、同窓会の設立時からの目標であった「同窓会会館建設」に代え、図書館の改修事業に合わせた「同窓会室」の設置をさせていただくことといたしました。実現に向けて多大なるご理解ご協力をいただいた学校関係者の方々には心より感謝申し上げます。工事も近日中には整備を終える予定となっておりますので、会員の皆様、是非ともお立ち寄りいただければ幸いです。

話しは変わり、今、学校では新型コロナウイルス感染症の感染防止対策に大変苦慮されていると伺いました。特に県内外の各地から学生を受け入れるための学生寮においては、集団生活を余儀なくされるところであり、あらゆる場面での対策が求められるとのことです。

そのことから先般開催した本同窓会の理事会において、同窓会として何か母校のお手伝いをできないかと話し合い、その結果、対策備品の購入等に充てていただくために寄付を行うことを決定させていただきました。新しい生活様式が求められる今、これまで通り後輩たちが安全安心に学生生活が送れることを願っております。

結びとなりますが、本同窓会は母校が発展継続することにより新たな会員が生まれ、さらにはその会員相互のつながりがあってこそ成り立つものです。本同窓会が会員の皆様にとって身近な存在に感じていただけるよう一層努めてまいりたいと考えています。

今後の同窓会活動にご理解・ご協力を賜りますようお願いいたしましてご挨拶とさせていただきます。

新任校長ご挨拶

松江工業高等専門学校 校長 大津 宏康

初めまして。令和2年4月1日付で、松江工業高等専門学校長として着任しました大津です。この紙面を借りまして、略歴を紹介させていただきます。私の生まれは徳島県徳島市です。高校卒業後進学した京都大学・大学院では土木工学を専攻した後、大成建設株式会社に就職し16年間勤務しました。この間に担当した業務は、技術開発、海外留学、現場計測管理、設計、および企画と多岐にわたります。その後、京都大学教員として転職した後も、23年間で工学研究科に加えて、国際融合創造センター（現産官学連携センター）、経営管理研究部（いわゆるMBA取得のためのビジネススクール）、およびアジア工科大学（タイ・バンコクにある国際教育研究機関、JICA長期専門家派遣）と数多くの職場を経験しました。これまでの経歴を振り返ってみますと、「多様性」、「学際化／業際化」および「国際化」というキーワードで要約されると思います。そして、このような多様な経験を、本校における次世代のエンジニアの育成に生かしていきたいと考えています。

さて、松江工業高等専門学校同窓会の関係者の皆さまには、長年にわたり本校における教育研究および課外活動に対して多大な支援をいただいておりますことに、教職員を代表して厚く御礼申し上げます。特に、昨年度は同窓会設立50周年関連および図書館改修関連事業に対して、多大なご寄付をいただきましたことに感謝申し上げます。図書館改修事業につきましては、当初の計画より多少遅れましたが、本年8月17日に開所式を開催する運びとなっております。新しい図書館は、従来とは異なりラーニングコモンズを取り入れた明るい学びあいの施設となりますので、同窓生の皆様方にはご期待いただきたいと思います。

ここで、今年度は、新型コロナウイルス感染症の関係で、すべての活動が異例の対応を強いられることとなっています。本校も、前期は学生寮を閉鎖し、遠隔講義を実施しています。この間に、同窓会より新型コロナウイルス感染症対策にご寄付をいただきましたことに感謝申し上げます。これから、後期には開寮するとともに対面講義も再開する準備を進めております。しかし、ウイズコロナ、コロナウイルスと共存するという「新しい生活様式」を確保するためには、寮の対策をはじめとして解決すべき課題が山積しています。この課題解決に向けて、同窓会からのご寄付を活用させていただきたいと考えております。そして、今回の対応を踏まえて、さらにポストコロナの新時代に対応する高専を目指していく所存ですので、同窓会の皆様にはこれまでにも増して益々のご協力をお願い申し上げます。

「退任にあたって」

松江工業高等専門学校同窓会 前副会長 小山 厚（3期・生産機械）

私が20代の頃から携わった松江高専同窓会の役員を、先般の理事会を最後に退任することとなりました。40年以上の長きに渡り支えていただいた会員の皆さんをはじめ理事、卒業生教員の皆さんに感謝を申し上げます。

後任の副会長には生産機械8期で島根電工役員の井上さんが就任され、少し若返り行政から民間に代わって、新しい風に期待したいと思います。

さて、昨年11月の同窓会設立50周年式典は盛会に終わり、2代目となるマイクロバスを学校に寄贈できました。また、今年8月に改修工事が終わる学校図書館には、長年の懸案であった「同窓会コーナー」を設け、会員が気軽に立ち寄れる場所をつくることができたのは良い思い出となりました。

私が担当した広報委員会は、会員の皆さんに会報誌を届けると同時に、最新の住所を確認する重要な役割がありますが、会員数も8,000人を超え、限られた財源の中で郵送を続けるのは負担が大きいことから、今回より同窓会のホームページだけに掲載することになったのは申し訳なく思います。

最後に松江高専への今後の期待を込めて、会員の皆さん、役員、教員の皆さんにエールを送ります。私は母校に対する誇りと感謝を忘れずにこれからの人生も過ごしていきたいと思います。

「松江高専同窓会　副会長就任のご挨拶」

松江工業高等専門学校同窓会 副会長 井上 祐一（8期・生産機械）

松江高専同窓会の各会員の皆様、初めまして、生産機械工学科8期生の井上祐一と申します。この度、永年に亘り同会役員としてご尽力された前副会長の小山厚様の後任として副会長を務めさせて頂くこととなりました。

私は昭和51年入学、56年卒業以来一貫して地元松江に本社を置く島根電工株式会社に勤務しています。現在グループ会社を含め18名のOBが勤め、夫々が社業発展に寄与する活躍をし、現在は630名弱、入社時の2.5倍が勤務する会社に成長しています。今年は本校創立56年目、同窓会設立は51年目を迎えます。その間約8千数百名余りの卒業生を世に送り、就学専門分野は本より、多種多様な分野での活躍をされ、国や地域社会・経済、或いは文化の発展に寄与されています。この素晴らしき学び舎での5年間は、部活にのみ明け暮れた様な日々では有りましたが、私の会社人生を支える矜持の一つです。然し乍ら、地元に居ながら誇るべき母校へ何一つ恩返しをせず悔悟となっていました。

この度、良い機会を与えて頂いたことに感謝し、同会と母校発展の為の様々な課題に会長他役員の方々と共にチャレンジし、少しでも役に立てる様に精一杯務めさせて頂きます。

今年は、未知なる脅威のウィルスや大規模な自然災害に晒される年とはなりましたが、会員の皆様方の今後のご健勝とご多幸をお祈り申し上げ、結びの言葉とさせて頂きます。どうか宜しくお願い申し上げます。

新型コロナウィルス感染症対策のための寄付

6月20日に開催された令和2年度第1回理事会において、母校の新型コロナウィルス感染症対策を支援するため、50万円の寄付を行うことが決議されました。7月15日に同窓会長が松江高専を訪れ、寄付金の贈呈式が行われました。当日は山陰中央新報の取材もあり、7月17日付けの紙面で取り上げていただきました。なお、この寄付金は、学校生活再開（8月4日までは遠隔授業）に向けた備品の準備に役立てられる予定です。

編集後記

本会報は今号から郵送による送付を止め、基本的に同窓会ホームページでの公開に変更致しました。これは、同窓会の運営費と会報の発送作業を考慮したもので、会員の皆様にはご理解・ご協力をお願い致します。なお、昨年までと同じく"紙"の会報をご希望される方もいらっしゃると思いますので、別途送付する往復ハガキでその旨お知らせ下さい。

ホームページと言えば、私は立川志の輔師匠の落語の枕を思い出します。商店街の夫婦がお店のホームページを作ったけれど、全くその効果が無くてお客が増えない。そこで、ホームページを作ったと言うチラシを作って駅で配った、と言うのがあります。本同窓会のホームページも、以前より内容の充実を図っておりますが、会報の掲載等で会員の皆様にさらなる情報発信するため、理事会、広報委員会で検討できればと考えています。

さて、このページに寄稿頂いている小山副会長が令和元年度末で退任されました。広報委員長を兼任され、会報の作成には初期の頃から携わっておられました。今後は、私たちの作った会報をご覧になり、アドバイス等頂けると幸いです。小山副会長には、永年に渡り同窓会活動にご尽力頂きありがとうございました。

松江工業高等専門学校同窓会 設立50周年記念事業について

松江工業高等専門学校同窓会 副会長　糸原　保（土木工学科・19期）

同窓会員の皆様におかれましては、多方面でご活躍のこととお喜び申し上げます。この場をお借りしまして、「松江工業高等専門学校同窓会設立50周年記念事業」についてご報告申し上げます。

同事業につきましては、平成29年度末より、会員の皆様から募集したアイディアをもとに、事業委員会、理事会にて議論を重ね、事業の柱として、記念品の贈呈、同窓会室の設置、記念式典・祝賀会の開催を決定し、平成31年3月には実行委員会を立ち上げ、本格的に推進して参りました。

記念品につきましては、学生の校外学習、課外活動に利用するマイクロバスの更新に併せて、後援会と一緒になって、先行購入し、平成30年1月28日に同窓会長、後援会長より校長先生、学生会長へ贈呈しています。（詳細は同窓会報第8号（2018.8.1）にて報告させて頂いております。）

長年の悲願でありました同窓会館の設置につきましては、予算、場所、管理上の面からも調整に時間を要しておりましたが、老朽化しておりました図書館改修に併せ、館内に同窓会室を設置することとなりました。図書館の開所式は令和2年8月17日を予定しております。同窓会室の概要につきましては、同窓会ホームページ及び次号の同窓会報にてご報告申し上げます。

また、記念式典・祝賀会につきましては、令和元年11月3日（祝）に松江市内のエクセルホテル東急において、平山けい校長先生（同窓会名誉会長）、名誉教授、現職教員の皆様等の来賓を迎え、総勢120名により盛大に開催させて頂きました。

第1部の式典につきましては、陶山同窓会長、平山校長先生のご挨拶を頂いた後、同窓会活動に多大な貢献のあった5名の会員に同窓会から感謝状が贈られました。表彰者を代表して渡部修様（土木工学科1期）が代表して、「今後も我々、同窓会と学校とがワンチームを組んで行くことが大事・・」と謝辞に併せ決意を述べられました。また、設立50周年の記念として、学校に対しマイクロバス購入と、図書館同窓会室の設置資金の贈呈式を行いました。

第2部は、「たたら製鉄の技と精神」　～誠実は美鋼を生む～　と題して、国選定保存技術保持者で、日本で唯一、島根県奥出雲町で操業される「日刀保たたら」の 村下、木原 明氏による、記念講演を行いました。たたら製鉄は、職人たちが千年以上にわたって積み上げてきた高度な技術であり、操業を通じて、ものづくりの「心」も伝えておられ、同窓会設立50周年に相応しい講演会となりました。

第3部の祝賀会では、草創期の会員の皆様には懐かしい逍遥歌の斉唱、宮下副校長先生による松江高専の近況報告や、卒業生バンド「直野ヶ丘フォークソング保存会」によるライブ演奏と盛りだくさんの催しと、恩師、同窓生の懇談で楽しく和やかな時間を過ごすことができました。

今年度の図書館同窓会室の開設により、設立50周年記念事業は全て完了する事となります。最後になりましたが、本校教職員、同窓会会員の皆様はじめご協力頂きました全ての皆様に御礼申し上げまして事業の報告とさせていただきます。

令和元年度 定年退職教員 紹介

退

昨年度をもって、宮下眞也先生、森山恭行先生、長澤 潔先生、田邊喜一先生の4名の先生方が松江高専を定年退職されました。その4名の先生方にお言葉を寄せていただきました。

高専在職中の思い出

人文科学科　宮下 眞也

私は、13年間の中学校・高校教員後、平成5年4月に松江高専に着任し、27年間勤めさせていただきました。技術系高等教育機関で様々な経験をしましたが、特に、初代キャリア支援室長に就任したとき，松江高専が「社会で即戦力となる技術力を持った人材を育成する学校」であることを痛感しました。卒業生の皆様の会社でのご活躍が松江高専の高い評価につながっていると常に思っております。

在職中に、自分自身がバレーが好きで、バレーを好きな女子学生に遭遇したことがきっかけとなり、平成10年に女子バレーボール部を発足させました。同年8月に参加した全国高専女子バレーボール大会で初出場初優勝し、次年度も優勝しました。その後も全国高専体育大会での選手の活躍と功績は良き思い出です。

部活動以外でも、学生会顧問4年と学生主事3年の間、学生会執行部と学生委員会教職員とより良い高専を目指していろいろ取り組んだことも思い出深いです。特に、マナー向上、高専祭準備，生馬小学校除草作業が挙げられます。様々な要求に応え修正する学生の姿を見て松江高専生の能力の高さと素直さを痛感するとともに誇りに思っています。

退職後の今は、40年間の疲れを癒すことに専念しています。その間に、忘れていた自分の趣味に思い出しながら取り組んでいます。

末筆になりますが、退職に際し同窓会より記念品をいただき誠にありがとうございました。皆様のご多幸とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

近況報告

人文科学科　森山 恭行

2020年3月を以って26年間勤務させて頂いた松江高専を定年退職しました、人文科学科保健体育の森山恭行です。故鍔木哲雄先生の後任として採用され、バスケットボール部の指導に携わりました。在籍時には1、2年生の授業を学年で担当していましたので、42、43歳以下のほぼ全員の同窓生の皆様とは関わりをもっていたと思います。大変お世話になりました。頭に来ること、失礼なことを言うこともあったと思いますが時効にして頂ければと思います。近況を報告して、お礼のご挨拶とさせて頂きます。

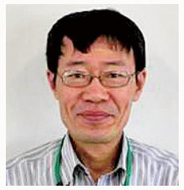
時間たっぷりな毎日を過ごす現在の私は、週に2、3回のペースで近場の山登りをしています。遠くても夕方迄には帰ることのできる範囲ですので、ハイキング程度の山登りです。とても効率の良い運動で、上半身への筋力強化刺激に乏しい事を除けば、心身の健康維持増進にはうってつけです。しかし、元体育教員の本性と言いますか、ついついコースタイムや前回のタイムと勝負をしてしまいます。悲しい性です。写真のバックパックは、同総会から贈呈して頂いた退職記念品です。この場を借りて御礼申し上げます。また、物作りが好きなので、時々木工や革細工も楽しんでいます。

在職中の出版が叶わなかったバスケットの指導書完成を目指して、他高専の先生方とリモート会議を重ねて完成に近づけています。そして、身体の様々な事についてアプローチしてきた経験を生かし、平日の4日間の夕方だけ、定数会員制で体調を整える事をサポートする業務に従事しています。その他、バスケットの指導者の育成、スサノオマジックの活動協力は今後も継続する予定です。これからもバスケット部の卒業生との繋がりを柱として、末長く松江高専と関わって行ける事を願っています。

高専生活の思い出

電子制御工学科　長澤　潔

私の松江高専での教員生活は、最高に「恵まれたもの」でした。多くの学生諸君、教職員の皆様に「感謝」しかありません。ほんとうに有難うございました。約20年間の高専生活を少しだけ振り返ってみます。最初の年、私が40代のはじめ、まだ少しスマートだったとき、やる気満々だった私に、「先生、あまり頑張りすぎると学生が引きます」と声をかけてくれた学生がいました。この一言は私にとって「目からウロコ」で、「主役は学生だ、学生の目線に立たねば」と気づかされました。「一応熱意は伝わっているのね」と少し嬉しく思った記憶もありますが。この貴重な一言をくれた学生とはその後も交流が続き、今年三月、彼が贈ってくれた花束が我が家の玄関を彩りました。初の卒研生が、「じゃんけんに勝ちました」と笑顔でやって来た留学生ノール・ヒダヤー・ビンディー・モハマドアリさんだったことも大切な思い出です。彼女の行動力、語学力、そして学習意欲の高さには驚かされ、これから接していくことになる学生達の「無限の可能性」を私に実感させてくれました。初めて担任をしたクラスの面々に、謝恩会で胴上げされたことも大切な思い出です。本誌第7号にそのときの胴上げメンバー（10期生、長澤研の卒業生）の笑顔をみつけ、活躍の様子を嬉しく思いました。松江高専での教員生活は、私にとって、20代の大学生時代、30代の会社員時代に次ぐ三番目の青春時代でした。関わりをもっていただいた多くの皆様に心より感謝申し上げるとともに、松江高専の一層のご発展を祈念いたします。



石になれたか？

情報工学科　田邊 喜一

私は、民間企業と厚生労働省系の職業能力開発短大を経て、平成17年4月に情報工学科に着任しました。高専と同じく前職の短大も実践技術者の育成を目標にしておりましたので、まあ、あまり変わらない教育環境であろうと想像しておりました。しかし、「優秀な学生が多いこと」、「教員の研究活動が活発であること」などを目の当たりにし、「これは、しっかりせなあかん」と気を引き締め直したことを今でも思い出します。

私の理想的な教育姿勢は“石になること”です。分析心理学者の河合隼雄氏が、カウンセリングの極意として述べています。石は、クライエントに対して何も語らず、寄り添っているだけの状況を暗喩します。表面的に真似るのは簡単です。しかし、そこには、相当量の心的エネルギーをクライエントに向け続けるとのしんどい条件が必須です。“今晩の飯はなんだろう？”などと気をそらすと、それは即座にクライエントに伝わり、それまでの信頼を一挙に失ってしまいます。以上は、クライエントを学生に置き換えても通用する話ではないかと思うのです。例えば、卒業研究では、指導教員が熱く指導しすぎるきらいがあります。そこをぐっと堪えて、時には、“石になり”、学生自らが、“何らかの気づき”を発するまで待つ姿勢が重要であると思います。その気づきこそが、将来、創造性を発揮するための第一歩になると確信するからです。

と、理想は高かったのですが、現実は甘くはありませんでした。立派な石になり切れず、右往左往したことも多々ありました。しかし、私にとっては、充実した貴重な15年間を過ごせたと実感しております。

退職に際し同窓会より記念品を頂きました。まことにありがとうございました。皆様方の益々のご活躍をお祈り申し上げます。